扶桑拾葉集

二十九

上中

扶桑拾葉集巻第二十九上

目録

東山道記　豐長勝俊
湘南堂記　同
西海道記　同
博多記　同
春日山の記　同
大井川道遊記　同
九州北道の記　同

内閣文庫

挾葉拾葉集巻第二十九上

参議従三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

東山家記

豊臣勝俊

ひとりゆきのり大をとこけたりて文屋のあそ
そ忘しられ山ちとをるといひうん若年
ゆゑ文のかること紙こんこうもあとよ
なこは山ちる黒木もとあるふんとも
山寺ちりのしきのをそうるちらら
るこぬ殿つくりうれ極楽をつくす黄殿
こをるあるもそれとこはとえふこと

るしおやかはやるの八すゑもろし然そ
く人のくふこうかくは人かきゆへあり人
ことをましてし紙のうすき人の色紙
いろえうりをやさしくもむへしや下宮ひん
しの山のかすと吴山といふ所ま幽居の地を
しむることあり松のそしらこやかきら斯
つくもまやらいされとあかぬともりけこ
うらうり奥しくとのかあるしのもその
紐かきも名あすうきあらはしてむしそ
おもよ常ま便ありてかけ家めのふさ
け函丈二尺とか訂まもうしひてこころりの

うへり杜少陵の詩古人の和歌あまれ
るるハ色紙りうきてをつみはりのつ
さるきことの葉もおりまみえうる情す
くさぬもかるいてまうさつく人あらへこさ
ねもしねもしこまさくれ家もつき松なし
はへしやかて富をはま白とす肉はそのまつ
うるかことし紙られは家はそのしつかなりけりと
をうしなるつまにほられとおもふところのふるき
路ひかいうそむなしうんいまひとかは独
笑しくそいふなりあふくいふなかをとしる
色そへりしうもめうこみ文一子人百尽

をあつめてとさとをむ
よはのくるゝゆゝしきあるよ
りていうちをまゝにまもるまき
代てのすゝさえんをとせるまつ
集をゝ公合のしゝ
ゝれくいつくの集をよて二百六十
よをよつりちのりてあをひ
りのゝ　ゝちをやわるゝちゝすこ
の外てゝとりくゝあるすりむてなる
れとをのつゝ琴一張ゝの文つゝえひ
ゝおすう　歌　たゝあもゆ（なるす

ゝりりてゝのおりよ夏人われる
紙をおしくさゝりゝのゝゝ来央
玄東図のあとゝあいひゝ上祭おせ
しするも沈よゝて絵しをお
りてゝをゝゝれとゝるのこ
りとゝまれゝはゝゝりゝる
くもしのゝすわるやゝるをみゝよ
も人ゝゝるきゝるしまりひられ
ぬ山ゝぬゝゝるゝすあゝなゝす歌をく
りゝゝゝ松枝ゝゝゝゝふすゝゝゝ本すゝ
くいゝとゝゝゝゝはゝすゝゝゝあゝす

まつよ岩あり里名曙橋をつくりそこゆく程百さいあまりとく藤門の鷲風をもそこまさすしもあるす宮とをて竹のたやしよいこまいる妻ふすしきみとこまいく程をうきてもあるすこのうせよあつきをそこすき新樹の柳よ曙をこさ神名いまつこうたりよとおもひうあるも山のひあうておのゆ秋いゆのうらるすよううとうれと実と家ここうやしあの春うしロをこうれるをすさこよううをいるもつれる

るうこうこ本柏のみすむをうゆるタつこ書こふ麻のしをあれよ山田のひこすこくゆるうをこうこし良還法師うやこを立いてるあけんゆよこのもれもへいけこるんとおもひうすよをこたるるる秋八こるうううもううるのこ石くゆして秋ををいこうこうすも国中のうこをこするうこうあるる祈こんをこうこうるのこをすうをけこるこをして人いこるこるいをるのう毛衣のわるこゆ

あらんとつきづきしかりけるせきより
ひかるをまへとまあるべきことをおもひ
かすべいつしか新宿の村名
まさしくしるしまてるきまとの行末
くをさとりぬとおもひてあるもせをあり
りそいまゑさしけるやうちしを
ゐりみちのゑてきさえまより庭の面
面くゑんをかりの間と苦のみちもとそあ
きれて事地を撫るまとまふなと名
わるをあり志れ志ちのるてゐ
そんもあふまれの細々をまの落ふ

れいとく人間なきる富士(いとうつ
りる情をもへわりさ海よりのほとる平
をゑ西絵志るくゐ富をけさわとけれ
てこれるてゐうをわるる人もあるとあ
るものとやうる彫のつるくゆをゆれ
てをいきく のすてゐれとけをしるて
ちす 見るるふ西のくをひ情るくおてさ
むくきくあきをいんをる新る
らつをまをとり松のをりえとひろあり
をる作業をうるるものゆるまるを
くくなるはをさ山新ちををかをを

ちのうの姫のをまをもとひてるひさ
りもやうてうすをたのこうするうら
うるまをもしりる源吾の名とけわ
り小河のうさきまをりうろ胡か
く雛のうをもとめをそ出すうさるる
一しかうろ海をやうるもこのかりり
うくくとうすをうされる山のををうろも
あくうれ出てうくうろもすをうの四年る
孫せりとつを物面の沼よくふの紙ひろる
新くう　物るまうをくしなうれをいと
くうろやうを御のさうひ地をのとを

ちをを何やうま人の役をうくくうを
の人るまをりうくうをうゆるも物か
り稲まふをふ一性のうるをのうを
よをれいれくをりるをつをれ
ををれをやうのりるをるふ
をりらぬをのあやしきをはたゆう
くてををれふをうをれふさ
ねをつまをいををれるれるよをうも
おし分ををよをむ物るれををしうる
ををうつををくいひけうれを
をうひうをれ物かのををいるく

すてて五月の月すこしのこれるほど
いとえんなるまゆみのさくを吹わす
風のわまきうつ音とこそ松の梢ふるわ
らうるうらきまさしみられぬうんとこそ
しらるるれつきのよいひをけふさ
やもけさそわすれぬきゆきそうら
えんといふ人もわるく紙こくをのうや
とりもれさりうりとおりふよねさし
ひつしきれけるちいさくてそそ結
おりそのうそきるるるとりまいつもれ
うんをうれけまて赤のまさまきるわ

りいまへの人わるまものうれるるる紙こ
れふしもたとえんとわれるまた雪を
雪亭とすす彩をつるぬうる松ゐて年
まる雪よのそわうれ竹のかうんわう松を
すうておうやれて京松中納言世をの
れてすき伯少倉山のうもも有
とうまうえんうさされて山しれ詠よも
しく山をまねのそうう河そよわそまる
もうへしうけ山荘よ主子をれるる
百首のうをうれいふおゆくふ上古の風神
のうりてそうんさひまけうらて

[illegible]ひ祝うあがすることは
明治のまことふし三十六人の和合いわ
ひすることいまわるきあらすして像よりう
ほうとりのとりの色とうけうとひいわは
れと うまゆくまるよ絵のうちきすし
の童子せく和かつうきうあれい来れ
せもつえまねしくて教九枚さうの枚一
ほよ四人てりいれ分仙堂をすてるは
しのうまるのくこれをけつねうまま
きりへの号ようくつるわるの待望られつく
九月もうこもとうまるの人の文をもせ

す成てりりはうの山陵よのりて月を行
事えうしまうふわくさいておし
くれを絵ようるすあの月れとううう
おのひいてくいるすてすて世りよ月
ううことはなうまるつけてるね
うるはあれをもうおりおひいてん本の
りよりもまるの月のうけを四そして房
系ふうへ松は稲よりさと四りをうるう
そうよ神いうしうわれるうろのひん
しる教十歳の園をもうくうろうすさ
西ようして邸生うれをつるていとうり

くるるを見すを諸葛の葉をうくていを
をむるくすかあちそひそらふまき
さとをさとあれの龍よはてをけそひ
のとやうけひの水のそくるりこをを
地の印あそいらをやるるさを
るつるをけを奥ていさむるう
ねのむこく嶽をうるてはきと
しされふるけむひふう移ひくやを
ぬるやまきるこしかれそひう南
の高よりねくすをるをすり
つ玉右軍ら石すりのなとをさるまる

そねとうこふとるく真手らうせこと
れうさてるれさるよ思とけいるつよ
紙筆をついやを絵もうまれきをれは
るるまれるすまる嶽のをさあるる
ゆへ嶽のむをれるる胡こうるるおも
むきはあれをひるやまのをひえ雲雲
のすをはのまふはてみられひくを文さ
ひをるるゆはのをうすくきはめうけ
のをへる家へうちいをんをるさお
りくはむしるけん臣塔のるあうとい
ひ一人をうやまを十文童るて

ぬまとらいひつたへし琴はおほくあやつ
らさとしきをへつねとみなもちてさむ
うちまれはいとむつましくてかくもたる
とかりするのわくとのすこし絃弥
うえす常に寿るのひきぬへり　松せん
むかし絃おりて猿子に化して岬の大
けてら蒼らこくしちろうすとも飛そし
いとつよやわらん絹ハ絶ひまりにされるう
晉の徽士なる絃の琴に似しせやとくる
たらも淑の恵をさりしやけるの
へしいかねとするとひけんへのこと

とすつかるまもいふくころもまさかまか
あらす香いさますしきふかひのまな
やかうかもみらうさすかちあめりつかと
りかすむまとみゆへありて魂をやとしかす
るうことを諸うきとうものすれそ氣むすり
れぬのむかしきおりふるすす一絃とさる
しますいふくれ　すつて山里のあかれ
いひつるをへきすもあいねそれうきさし
川ひとつす静かなると業とし安きをとて
しててこのあかしとなりおりせうると
ようらよらかして古里か牛をとはすなく

[illegible]

朝日家

常よりむかふにうちとるわらんべらいよ
いよの松山のしらべきまちわりてうよ
そうけちらして小よりわりて南よりとれ
れるのしらべいあるものかりてはいを
とりけてさうひきつきる屋ばりをの
ようにいなのうたきまんん
やうていきりのうちすーすくく
はまりまとりあわうとうとうとを池めけう

ようさうこうもかいつはうをあをわふ
あひ初ちうをてうんくさうちうをようろ
のこいけ四けこけこけ一けなとなさいくさ
うもありようあひてなきこなのようをき
ふをうをとわうて新先生をとうひ
つ松洞書よのわれまうこの書ふう一
村のうすこうりて大江の正云ゝ出示
ようをあうわうしいまもうあ初ようを
けうれをわうれ我の世のうをとれしつく
りうをねうむまくくの粕りられ中
よすんんんうをあくあうまりなうを

ち山川のあされ水まふこれるうちもち
ゆくもちふ石ゝそえのうきものをとる
はあをとれいくまふいらしきらやまき
のあちちありとしよわをちくもいく
しちるるるるるゆくゝ弟よくわけら
しまちこいあしよりつきくせれうを
いくよふまゝつくくしちのこと車のくみ
しつくしいきをふ尾よくきをををげら
しをのれよあくれるもふゆしをくし
くもあゆくるれのくまひのくまれひくも
ゆとかいふまちあちきれやまゝてく

いふへくもあくまをををいくおゆくくまふ
をくいくを枝くれつく枝をけといくくふ
ゆまつけつ山のくまくをあくあをとあ
ふ弟をくれくまふるくしをくやすみ
をくてまゝよりくさのわけくけむせるよ
ちむくくれの雲かくたるひきくくふき
あまくよくれく岸はをすきくくふこつ
ゆをくちのちくあくれきちやあくこ
ちるくくむくくよあほくよ亟るゆ女
るくものをひきぬれのひくくふいく
をさくれちあにこのきれいくくふち

かりあけはなとうとうれいひやうのわたを
ちらしちるそれほそくにわるるもいてるく
さいとつやうあるきをはりてそうよ
うくそくそくそくこれれおち葉のちりつ
もれるをひあつそて葉とそをまるものの
ゑふゆをふうすをそうてそとくそとあて
のをいゑちりわくすを容より日さのか
せをうをひすのをいを耳をあるまるへく
もわるぬ〜まつる柳のうちれうをを
ゑ風れけつちちをすの又わの芝芝
ををくくとうちるひきるすをぬをより

ひをりのをつりあるゆをいつを紙をり
るんいをゆるるをををを紙をもをいをる
きををこをのをわちりをきをも是の
け茶をてをまるいひをそんい秋のをを
うをうをもわるまる花のひをへのをうを
青の人のをををへしい紙のすをのをて
ををつをみをうちをををすれぬへて
うれくく花のをををををいひくお
るまるまるむすをのをををるるあを
るくかををををて坂をりあるまるちす
しさハあるをのをるあをハ紙ををををを

おぼゆれ、ゆきとりてなとそすてものの
わるいすきとうきつるのようていた
るをとりつしをあるとてあるを枝え
をわすれ黒板をつかりわるといきて
いれまあるうちあをこちとのさまを
ようもようようこともわるれとけうそ
ひてをよりあるうれしきあやかあ
ちれをろうきをあれをこれつ
ようきのかれやうらんようてる
をうけようちをきそあ
ようしもうひるしひねさ

ようをいてうきいてうう入おのをなうう
ばうもいつふけさうをこのゆえん
よりひくいれるよいくあるちれし
く書りをれとうちつるそそう
るふくれとやうふるひるを思ひけを
ひ山ひをようまうんをはうう
むやうの月二月いうりあるくおつ
るきをつちゆきのあみれをこをとい
ひしもおをあなをつはりしまを
ようりうくひりの紅うををうをと
おるををのををいをりのうる

たし

しりうの庭の井はるけはちて
あふうき秋の月もうつる
きちうのあるまてうりぬ月と金の
ちうをとしゆうあらのくきる
やうの世はうきをてうす月はよ
ちうてまさく金ちうとよ
こうしいふひなきりの　おりなとり
よはれうなけうもかいのとすくあう
みもうてうむくいひつうるうもうと
りうく月もへうむとすく月をうあも

れうんとのちもたのむ金ちうや菊ちう
あうれうらんとはちをまのむへしや人ちう
うむとのちもうのむへしやそこのあり
ちうのあうちうけとそ

西山ゝ家記

同

小堀山の楼閣は蘭ちあり勝相寺とうけ
ふ通風の額あうちうり方丈の前す
ありうへあるといひつうる花はのうちら
ありうちうはもうる桜のうすうまをわ
すまあるうちうへもむしはのうそなさ

けあり　ありし世　備後海やつれとう
を逆院　ときこそ　極楽大とと　ぬまるるし
きりへよ　陽地をむ　むとふ　ことあるしき
桐わり　根ふ　ぬまと　さわれて　そうみ　年も
くしは　へしうの　社様よ　仏ふ　ふりあり
こちらの　ふこと　ぬ　斧をとれて　いそうつ
るくと　ひるり　ふん　いとり　ふれる　ふり
ぬをの　つくを　ものか　ふれ　命わう　ものを　さねん
きのと　のまの　ぬの　ぬ　をとと　むるも　ふる
らぬと　りてわ　さこう　ふへき　ふやう　れを
ふすれ　わるし　ふの　むりけ　ふそや　とうれ

ろ　箱あり　ふりい　つれ　ぬ石の　へも　しらす
ふる　れぬ　ぬし

やまふく　すかう　ふふ　ふれて　する
ぬふい　さは　ひて　ものう　せる
いとり　ふて　やく　ねこ　ひり　ふの　石
ぬまと　ぬ　見て　とと　けう　何　ぬ　神　てまう
て　ぬひ　しぬ　ぬま　業年　朝　屋　ふう　ひ
ふく　へふ　ぬむ　しの　ふを　神代の　業と
ふすう　ん　書　日の　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ありう　へよ　年つ　ふと　ぬん　いへ　ふや　ふよ　星の
ふも　いて　ぬふ　ふり　ぬん　やふ　いさ　桐とう

もひけるとてやうやうかたるもいとお
しまるるひとりのふるまひのようす
玄軌冷泉の為京著作能ーいひしる
ようすのうちにも玄つくいと
まるるすしけさ為ひてを雲ひのよて
よおもひやりて活るもおもまねる雲の
るこうもあれるうさとこうーあすを
もの程ちりあわとうもをりうさ
ひりまてとぶてりうる月のひまき
びりも秋はすあちろりしまも
まうれり度もまうまをれうひろき

松原をうこひうきうまへけ
もせす肩のまうひのさ衣をけさ
うれうすうようるもうれうようちせ
松ようまてまちいつすうちうを
いとく奥おのおのこうもあうれりつ
れてふれうれう巻のむりうひきすす
松さへ石のありあへうふ姫ー眠のあう
まうう入うのいうきうう王玄城地の
楽からすを巻ふれーひうりうり
ようゆりのうう秋いうう〜のうきお
つうへてむしのううつまうよ志うのなう

さつゆけき森のうもれをくきて
ちをいくまちるりゝのえをひとを
さくよりてるまんれの花を思のき
一日もとてあをくすとこれしむ
作すこしあるのれ松その塚
やあり死なる我こをとるおあると云
り来のるとんまを思るやと蒙本
をくけ本立をのうち大さやうよて
高山のけよ望むはのはこさん
世まて あちきるのあるしるす
ゝ望をく獨こをものらるあ細

谷河なれて強と思をひくさう炎
亟をうゝむすふ乃つあるを炎
高乃胡鄭祭ゝ灞橋のをとをしひ
うあれを思ひなきけまれる

うさきるの寺のをいう形ん
いくかもさく京のあけ月の
伯思て郭のうへありといつまにに
しるりるの大分の高よいるてたこの
ともをるるあおとるまひいそん代て
のをを思をくあれをまをるる
ゝす新古今のちはひりるのるれ

但其はかつてしらもかなを兼ねてもいひてさ
らん秀逸をわつらはす一文字といふても猶
くはつてをおうすへうす四位の死罪を
ゆるしまして同はの半をもて京極書門
の書をとれ〳〵筆のつかはれてとれうもんせむ
あるうしこうもむへしせの人のよむかい
俗よりいてよるのあり歌うかいあ
まねく俗のしのうり遠の海山をへてこう
東のまとりいつ云芸はまうせそすう
さいこるされもをのつらこうき風情
あるあり古畑のそいの立東りかる

塗の友よりかのすとなタ書うくる
んうて和云もむこのうこさまあす
こうをこうるすうこのうこさるうて
こうをこうるうこそこりのようう
す市うう鶯をるすう蜂のつさとこ
のむりのるくさふよいつうこうろ
こたたまねわりて人をねうこうんう
へすくいるつう立東を貴すとなれ
風雅集の中う立東をれてあするをこ
き月のよへ風よ切うう蜂のひとこる
ありのまへ京氣をうこうれてう

もくのいまさ保せきすることいとあまた
しそれらう水上をるぬれを水面落き
有よそひえうう右の苦の妄さうう人
わきしるを玄賓と名つく僧都のう
ていたくそれ面をあ手落みことを家る
うやこのうちにまもねまさ物りといつれを
ゆをれわ面うしうちれをそ地りいつく
くしとうはるるをみ物を
つむ異よりものわてもひをあきを
くしるわけまきのうをれへても
うるもおしうけ所とつをの是のあう

すもわうねを根のうをてをれしき
異称の夜のまるうしうきうれう
り院よとをりやすをいつくるん
耳をうす高なくしてわしをそろ
きむくすをさひきを山らの毛そ
立わる歌ちうしを巻をふうをそく
ふくさのめのをうしてをす茶ます
へもあくすてしを異るよあとう歌
よくれいまちはすをしひさくれそ
き道をまをひてつをまいをうう
しをれといををろるをあれ

[illegible]
[illegible]の梅といふものを青八重の籬を
つくる虹のうへにて[illegible]
させる奥もゆかしく作者よりすゑさまの
くまくまの玉ひねもすきりかまれ
ておのひとりけめていひけむ人をそ
わかさくや暗の光明の仏似れ
ともぬぎかりくるすふがとありける
いまんわれむへし八十年をうの老の
物語のうちもまうちまれすらうれ
も我後とれく為をそそうちう

してそやわけまくるのきみらくま
しいせんといりそなされ宮
さし入月のさろ河そ山の端ちく
のこれるもるを為のゆ齢よるすくそし
ますをとのれて苦るる泉の人るれも
るりやうひよさけふまらるいわそ
れておのそさんそもきのゆ東山をの
山信よ松の龍をしの名大原堂のすそ
をの田井よ根芹をうむすをるむし
や美いまやうついまるゆのむうやうの
をうす荘園よわひて胡蝶ををそまは

しるべありけるを

さう夜　　同

山よ山嵐よわるすうるこちらくていさか
ひをへさつとしもなきこそ慣しられ宿
を宿ぢとよわるすう藤わかて菊よか
しうまきこそひしられさるから此
巣のうつるとりとよすうるやすくもよか
さうくさ春根うるの苦は菊のり
う花根のことをはしうむわしを
さうろきるれたうしおはうる

弟よかわるまりの四ひさうひてのそこと
けぬそらちゆきやいくそのさ秋をむえ
てうる宿の戸よすそめけむう門ふ
さへうを道もおきそしうりわ人る蓮
う花もこうるする花をかる池の
水をそ庭もひうるのことわれそうる
わるるるるまつむしのさすうりそ
てうるすむしのうをいうりゆ弟入
まそをんとうるつゆけきゆ人りう
うりをうきわうちすれうもわそれよ
しのうんものうるよすぶりて

なすみてさ此月となりいりけき　あまれたる
ありまいるまへる聞めてとゆつしむまて
さるまへしのみてもあしすさすうまる
とふ人もあれと鶴の毛衣とまひそあれ
あるをの許よりこ似をそらう紙の端よ
をこらひつけてうれうにそしるあと世
うそこすしらきそうらはやせらりと笑
へしみえりい御のすのわされいつちいはえん
老いこれまてきりのよなむしうしてひ
とつい山家のみなき松ひといつる都よ
ますいそくつままたのさるらも

きみのしるのいつますてうきし
東方未明顛倒衣裳詩よういひとある
文まやさやるらんさのこもしぬてまね
ふとるさりいうしまるうわきうとささうあ
まきしや衣の年も独ぬつうつる道よいそく
なうひいなすとされられ裳のすそより落
しうたとなすれと唯今のそのうさ南よかいとい
てむかしい忠のなあさらさ南まきし衣いう
う書本のうちれいとなすこまうそり買臣う
あらまくらしてこうしまされと鄭玄か元
しるせのうすけもなし色の衣一夜ませ

さまうきのそこまうきくしおりひい
つりれを四ろくとしていてきまいてくるな
くこのやうて独り物とむとをれあく
ゐる寝やのいろまよりりくる月乃ま
くるよ庵しちうけいともれすきまくを内
をまとろまれすまろひうしくしはまく
をうしくこくすやいわくね故閑白おまきお
くをくくハ信長公よつくまりをまつう
しに明智のゐふうとるくんいひえん
おこのもれ切目けゐきくろつきて
をうゐまうくしゐひこまりけ此屋ゐ

しくきくめすいてやけつれてくゐ
かあくん郭こきうてんまりをいうをる
をくくれつくものを乃ろすあこと
ゐひをいとくけほりおをけをいゐを
くくあれくゐこ乃軍とくやあれてれ
をほろかくしゐ君乃わをむくひあま
りれくくひくこをよ逃ひくちまつり
かいとけて紫野をおりてくれにをく
ふりのくくをこくくしりひまし
ゐよをゐ日ゐよりゐのをいを天下ゐよあわゐ
きくハ谷山ともくつくまつるはは

えらびまゐらせいそぎほとゝぎす
四社にてまうゐ人さうさくまし給
ぬやうにはるくとわゆきつきそゝ俊
武ちかやうにこゝきうはのうゝゝい
とものれしるいて橋のわさこまやう
よいとるゝゝうゝゝれゝもしつゝをお
りまゝさて四季いいうはくりみゝき
四射わまゝゝをらるゝけんぬんとゝる
りいうゝよゝちつゝを絵ゝん行ものゝ
ゝゝゝゝひとおりまゝぬゝと祇ゝゝれ
うるゆゝをはゝす車ゝれゝゝの四

門よはゝひゝもゝゝあゝぬ年色おりひ
るゝゝしゝれゝをものつゝゝせをゝゝゝ
漢のる祖尺ゝれ鍬をたゝゝゝゝ白
ひゝゝゝゝゝゝゝゝ大風おゝゝるひゝる
ゝゝ来ゝゝゝ東ゝゝゝゝゝゝゝゆゝゝ
秋畫尺つゝゝものをゝゝゝひゝゝれゝゝ
弱ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ坂の関ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人の薩ゝゝゝ沖ゝゝゝゝゝ小浦ゝゝ後の西射
るの海を波の孝おゝゝりゝゝゝゝゝ
らゝゝゝゝの主氣長是姫のむゝゝゝ

てり歌をよミけりまいりてぬかつきさか
しこまりいとやんことなしとおもしけれは
門きよりもくさすくしき名つき
多かね筆は位にはかなき侍従とならは
つきよりまとよさなおほろ宰の帥を
みひんなんしよのなみて中納言と守
ゆか御婿の敏によそのまうけしつれはし
ます下は仁徳のむかしの御世によつてま
みかきのうへの玉の臺は四季にてりかへて
むかふ面もまきゆきかとなりよき日にして
めしおれそまいりぬこゝちすゝしさら楽

めでたくつきさゝて多かさ滿くみゆめの
書いへはさるまりやしかいつよそひともめ
つらうすよれきめの見なりしかへの大
納言利家後前の中納言秀家侍従宰
相中将侍従なとまてあまたおほかれと
れもらつねとことをのよきらしう
つまくいてゝるおましまてゝとかさねえも
いたる錦のなしさしきれ志まいりて
はとやかるの藤たかくまうせはらんまへ志
て玉のまみ対面なまひらせ給ふ時は宰相
等の旧例とそこさえしきう給ふへし

とてまつるこの国奥あり出雲乃国まつり
て度々つくりてまつれるものたちなりき
すれども山もさることなくこれいてたんこ
く秋ひるる西八つる花あるやうきい常
うれとこれを角しかなまりうしあるあ
る月をもるはを鴻脂乃ものすこう
てこれをうるおはをすつて家王ひふ
ちるるくせとこの西へむつひをるを
こまんと孫うまのこをわくをする
ちうりといへるをなるれをいひつけん
もをとるるまいさやうのるい

いかーへの代こもわりやるやと天新陸
のうるとうるとうひてんこうきやい
ま言るをひへ玉の賞ゆんのれ柿ふむ
是をうれれうしく流潤乃尾中こわ
さきく秋へのれも色とのて星をうむ
とあやまれひふを紋ちとをみ星
もみうき煙をのそん民のまるきい
ふへむるるうをはのすて門母ひ
ふれをすた母あるきこるわくく
たるをけうのいこちいるるれ
しあまさちうひるいこをく取ふ

く見とかゝしてとりのそらことなき御はか
めさき月のひかり出のよふなそこのうき
ますみもさやうとまや水の流もとりつきて
てまつりは糟糠の御妻をし蕾よりくさ
しのまゝぬもあはれなるをしけなし御ちは
さるためしも露おもはせさりきまつりなれと
まいらせさせおほやけしく前の人をとめ
くらのとなりすくしなりけれはきちにかへ人々
もとのつまをかうるにひとゝいひわたりまへし
文王の大姒もうらやむやされは后妃のよ
きためしひなるへし栄花物語に一条院

の御代のはしめ后中宮女御更衣あまたその御
ありさまはなるをまされたる御調度ましてい
ひとうつくしきまゝにいとゝしくうきたれ
しは栄花の淫欲なるをとゝめたまひさ
れとそれはこゝろのうちにはさとあらはすいまは
世の御そてもさきと御門のゆへにこそせよ
まうしはいとくちをしくてけふおもひても恭
深きうらみとやしきさまやましさこのま
せさせまふおもとしまても春秋のこゝろふかう
おもひしらさゆかりつけたりける御すさまし
こゝろせましきもの給けん御ことも月花

おのて おこすへき はるのひとくぬ
くりすまをのへるそれ竹のかこそよの春
京のこゝろこの春ハ殿原をゆすりてひ
きけしらうこそいますゆとなるそ
京こゝろをして北斗をさゝかるひさ
ふるまをゝのこゝろの春ひてゆる花
ゆけをくるのすます（きはをそして
きこゆをいとをさをゝるまをまゝり
つゝしひ四海をゝはゝとさゝく大和も
京のもさるこゝろふわるんやうれしも
みをををゝるをゝすゆとゝゝろ

こゝをゝきれいまをむしおこゝろ
なゝりけゝ孝ゝのゝりやをもこゝろひは
をゝ人のゝをくゝまは四海みゝゝんかひろ
うゝゝ車をすゝふゝをいゝもゝゝろえ
ぬゝさゝむゝりゝ

たちゝゝ
ゝゝをゝゆゝのゝゝゝの春
ゝりひわれゝしのふくゝ花をゝゝ
ゝゝはひゝゝをゝゝえゝきゝゝぬ老く
ちゝゝゝのゝけゝゝひゝゝ

春の山ふを

おほうたの京ふりうりてやせかう
おちる〳〵きまのこもすかはやのい
さちいけとおほくてひろさこうえん
れとまれほそろひきさるけしきつほの
こしらとおのろうされぬ人ふあく
れちるんゆやまされを
〳〵とひとるうたのうぬひとのしそ
まうもわんやうひの十日わまり
六日のころひきすさぬさうかう
てやいさ月のうさるうるうさ

同

といひて人〳〵おりぬ杜の下草をいそんも
まいとれうへきじよひるれとてをつを
おをかへきすちまふわさ中納を
のきこときゆふ人りかさく
れなふ波とるいまわ角の河
のるりるれる人ふるむあるけう
あうしのるふなりひくくもわねさわ
やむこれきいこもりうひりのさき
さうまふいとりうをのを
せるうすまへられすあいやしまつ
くれふうるうこひかせるこのまけう

ないひまおゆくとろ宇治とや
れ新ふしのくさきやゆまぬさてもか
のむくふりむてろすこーうきたち
ひて紅こそあるーとひとろわす高
よろひうちひうこうおのこうやや
もうりありておれこうるもちいて
うんをのりちつもりすれよ
うれうますもい高れはさわは
をうるこれらすけよこをとうしの
うやまいひはむいのりれ紅りあうをひ
むめくあをゆやるをしのをとうる人
もあんこいうの紙ちもをれも
ひとりはりあひてさくうのまる
えひはきくはのとをこゆ門
う

たつるこれよころのあうれて
くるさわるぬ高れ山あこ
紅のをまかんこをるいふ侍のて
うるやといおーすてやまとうはハ
をんかのをあをへさわたるをい
まれまこふさまあぬをいとられ
しきあも

[illegible]れの人まちて[illegible]
[illegible]のちいちりぬもの
なといひつ[illegible]まけさまよちつり
[illegible]ちしちちしめら
[illegible]しまいめこき人よすわる閑唄ら像
をる昇らるけるきよれもそれな
りけ[illegible]たこのそこ[illegible]
をけるふ[illegible]さきをこのうつきまと
[illegible]の春ちすちるとあそひて
[illegible]いと[illegible]ゑ云四さへるけら
といひ[illegible]さいのものとふとちる人も

のりそれそのそこちちさけふなふ
ぬすれ一三をあるそふくむまおりふ
なりていいたなるきよ云の佛なとよ
ひしそ[illegible]東坂さんまら赤磯の賊
なとやういひすむれいふりすむいと
[illegible]そ異しはけるはもけれそ
[illegible]ふる人上中下となくこのやま
よはとひつちはりをのりくるも
はちるそれそきこゆ悔なよくを
ちくて行まよわんふひのしふ
[illegible]ふ[illegible]つ人のふひき

あまそてなくてくれしまかそのす
けん茶はなふらありしらきそたのかくま
なやし胡くひつるもみをいつらいよけん
ひくるぶよあと人のきくもなくくそお
めつことりよこゆしなるかりし道の月
とりよなひなきしうへとりいさひ
えうまふいつれといつれとこわききてく
へうもおもすいとけりあつこめみなり
うし秋は月もなるやうなるとこゝろと
きめさすかとさかれときたりより
田舎みなうかきくしかるあめいとたし

これし篇かれはし家路ぞうへすなん
なとのおりとくれさくひきおけるさ
とりかのさうきてさうそきおりくさ海
たてんのしまれなふられけん人ならまさ
のりとへのきくとききかつきしそてこそ
なまこれ おみと つまはきとして
なとうむいとおもし

大井河逍遥記

同

山水を愛し 歌よ志なかひとし おもれ庵
住るまあまなれの邦ゆくり 老たる今日

こしらへかの病膏肓に入やあらん
きのふあまりに心ゆくまで住ぬ世にし
あまはせめて柳子のやすらかなるを
て鮎鰯潭にあそぶ便をうるに思ひ
わすれ侍らぬわかれらんしもの山の
茶くゐるの筆あまたは駒とめて絶く
むかしの西川のさわしき新ゆふ根岩
せせらぎのあはれなる鯛をのぞく水
のいろ蘆のまもさくなかなぬれき
鹿もあはれ魚みなもれあはれまま
くるのしもおしなんて拾ゆ給か

ちかき鳥さへ海上にのぞまれは宋の儒
園の三筆をおもする心すなはち
さかのし寛永九の年れ此秋の長月の
末の日大井河にあそびしかせさえは次
名あるは天龍寺の備前之東院やと
りたるは嵐山やまのあなたしのさしそ
大醫玄冶法印沙汰をしれありさんまい
あまたの内物きよしなる老も綵鵜かも
たんまろしるあはいものや　けり
心ちよく酒の好器も飽まて飲くひ
酔ましまもわくまいなやにかたむる

大井川のかなたまでさらいつくすなんわるく
川さえ嵐山みたいなさいたとこ戸雅頼の
陸の白糸をうれしくみるとおもいたるまで
にうまくたすけ白糸をかのもの
きわうさいもむうなくなくなくなくなくなく
り　ひとりまたるるなかれいかまいまつる
伯人弄仙の言はものの花ふかは河よ
とゆるさるるまでとすの君はは
ふるよはなかなきいかこの
まくれいたくはもを春谷心をそ
えちわくをかるもすくすく人も

わるくんうかる白川ひとよ家居せて
思ふさいたりしさるは世ふるるんうもの
ちもむくうるまくまくくくくくくくくく
首藤中書王兎求裏の賦ひるる毒をを
句ふうわるを発するすの茅を知よ
りむるるするるひかりを玉蕊仙
長たちんいひくくくくくくくくくくく
の恵はかかかかかかかかかかかかかかか
ひうつるくくくくくくくくくくくくくくく
さりはゆるふるるくくくくくくくくくく
もいるるるるるるるるるるるるるるるる

寳なる事をそこそや すゝめぬこともの色を
つゝむるさむいあふ底にまくむ事ふ
みちあり色めねとぬすにいさそへ
てもそかくうく罷ちうすたをしとそ
見まちやくゆめりそのけ筆のいわよ
なきはとまけるかの露のひと宮
とひあくともひしのわとし色まちうむ
たれのさくはなれ 杉林そ
ものやうさし とするわまし そのうちに
うたとは身のさかまこと亀山へ
思種めのまり 庵をひらか

いまさかる程ちりうすれそ名残をし

九州のみちの記　　同

大相国ちうさいしるさむ事させ玉はるとん
とし天正の末はしさ薩摩の御出馬を
きこしめさるゝまゝにわれも日の本
の兵のうちなる倍なれは身もむ月の中ハ
五日に京をおもひ立たむかひまかりまて
まかりける人のかたよるおんそ調して
旅よそほひ 二首ばかりよむくわへらまる
まける

さ海とのみちのしをりさへ
しるみかてらりきかんとせよ
おほく小史絶えさねはおかしかるも
おりよろいちへぬそおりなは
読むんそれすぬものかりのさかり
を筆のまゝにくうちそとち
あるも心経るそる月ひをしのへ
らまてよりまかへし
きみなるこみちの山風さむし　ゆきも
すきまかいてまんさひのそこまて
きつかさし　妙なき　いろ香のうき衣

くるくもうらんとやらん
千里晴のおほうつさよとあるはなかきの
婦なきこゝさまく柳ひよせて浦なき
須磨明石の月をながめ浦風
関ゆきとよしてわたるくま日おきま
里はゝ浦まぬ絶こふ志てし女ふ雲
人をかくおもしろう重げる沙く絶
ありさしく
いてものさかえさくる花
まつまさきひまをひさしくも
かくよみをゆるく日うへる梅へ浦へ

よ御中へ入まきしの中心よりはきぬ
つまづまのわまりすまさてしこうりき
たんたんは御をいかに若名はいろ
家をみるは御をいかのをとのうを
こしわうふしきの乃中心
をのわをうちうちうこうれをちいさ花沈の
おのよりをあをいつを清水なるより
かれ清水に花月をちはひもちゆる
ことをしとをんいをの若門の知ろ
さ華華をしをのれるさいうなん
わをくるこを和を神主乃家ゑ山面
ゑ毎望日ハ面をかぬ毎をくれをゆをも
屋根屋葺ゑ文はをはうしはすれ
をちこさ元法大明神山とゑ出をれ
やま釜をれををくををををを
ふをの面ひをの神佐とをを乃富
毎ゑ切ひをしをなをををむよ
しをををををををを毎をを面と
よいをちをのやをを主をを山を
をををををりをを神秘山
なんひををしをれを備後乃
をやいよ浦ちをわをを十日何

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

わすれもむしもさのうらの
あるまつといひつゝ今はあま
くもとゝまる孫もさる物も面人も
さゝ[illegible]
なと海[illegible]人を[illegible]をけいさ
四人をとゝまるとゝ[illegible]
四季をとゝまるみゝをとゝ
ゝ[illegible]の[illegible]
[illegible]
事もひしにうりゆくそのあま
出をいとゝ[illegible]

ありくれも京へ内に出りすもち
よるまくりまて内へくまでくまかし
いさいわくるまに志らしくうるま何ゆき
輪なんにくりよりまでも志ゐくゐ中にする
れくゐさるまわへおほんく紫来ると
いかまのすせ日書分まく内のまけるとせ
あそひけり其ゆくるまなる男女もしこ御
あり内りきゐく見へ寄ま内舎りゐ
く面こともぬんはくみりやれほええん
さく月え山お錦と澄のかつまくさや
うるゐるすぬる さと人もうくやなうしらん

とおもひいるく帰小なり西かなころ
もたえなかなし孫をいくたくともわひたる
味つさぬまても内よ入想てもおほくく
宿のまへなりけり辻堂のさかまとうり
すゝいくし在のとり在ぬく面ほそ
月やあくぬなるやむかしをりさう
来くたくりくりあくまでぬるさとく
文はちた深きてし　やまくる山とも
しらのそやすくくる森
おもひそやおもし　このせよあらすみく
ますくりこぬまませんとは

なるまゝにあれのうちとうち所よりあ所
のりくおりちき浦こゝちち絵を
なくさえくすこうゐるさもこちを
めくきさちちしくなむちうゐするる
春色物ちく為おくきしうり回もう
くあ言ちんとすもそを人位所ても
わくぬうちなる沖の小浦よ舟よそて
一和寝よりそひなくうとのさちち
かそううな祢のわそれも為小紙
まくまちむひしもるるうそよお
すしまうかなるる何しもあを逢ゐる

年のしるふらそるるをこゝく
和をすくく逢とりわ沢ちる雨ま
うな祢のしすとな紙わるゐり
見をそくぬうな祢の幸沢まを
さくひくう為なるのをとれね
なくちは為くるるけるりいくあえん
武ほくのほをまるや眉ちうへおのゐり
ちくむすわをそをふ舟のうち
をしふきくうるさうそふすて
ちくちやをめんと童ひとうくいゐり
の鴉まわうをくちるるうるみわりき

くれと稀なる人の姿さへ
あはれさへなるものなり後のことのすま
うまでくいとゝ紙つゝみをしかまへ
なるる事うしいるるまゝしまき
ふかわりくんあはれまわりまきかた
の角を斜つゝるふ涙のうるる
きぬ舟ちを用ゐまくやいふ
あり紙弁とうさに家新まま
人も用ゐひまゝゝ角おわれを
分わり事げるよいゝ明るしを
てゝまぬまゝ角まおりぬゝまま

みるゝちいさくゝらくゝき見ゝも
まゝお用くあるを動ちひりちゝやゝく
りの新きゝゝり藤の巻蓋の
いつくゝ用り行くゝ一ゝも箱蓋り
ゝ事ゝとゝ紙屋ゝ事する紙のゝ紙
ゝるゝゝゝりくゝれもゝゝゝみ用り
ぬゝまゝみなゝ事けゝはゝれゝりまる
今おゝゝゝ書ゝはゝゝゝゝりにゝん
見ゝはるゝゝむゝなゝゝひゝ行ゝ
まゝゝりゝゝ見ゝゝいゝゝゝゝりゝん
あひゝゝくゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

く晴てうら〻く霞やまとゝは面うら
霞まうよ新もゝとゝあ馬なゝの
ゝゝよちいさくりんゝくゝゝゝゝ
といふる三月ゝゝ松やゝ
ゝれゝあゝ浦ゝ無紙ゝゝゝ今和ゝ
月のおゝしゝゝゝ潜ゝ海ゝいゝゝゝゝ艇ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ自ゝゝ清ゝゝゝゝゝ
清ゝゝ紙海ゝゝゝゝゝすみゝゝれゝゝゝゝ
く海士ゝいゝゝゝする決ゝゝゝゝゝさ
ゝゝわのゝゝゝゝゝゝゝ酒人ゝ墨ゝゝゝ
海面ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝ枝ゝゝく紙ゝゝ橋ゝゝゝゝ云
物をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なる蓮ゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
わゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
海紙ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人海色の月といゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ細ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]や[illegible]の川らん
[illegible]ひのはまゝ[illegible]樽[illegible]
[illegible]こう被ほす海もそんてわく
[illegible]の国[illegible]もなるねさめ
船のうち彼[illegible]
国よりあるまゝ[illegible]
[illegible]みゝち并よ一門の[illegible]卿度上人局
内侍以下まゝ[illegible]
のゝうしゝ[illegible]
事と[illegible]
[illegible]

[illegible]
不さく神をぬまをすゝ[illegible]の海表
むゝうゝとゝゝゝ波のなゝりて
[illegible]を弱の[illegible]海[illegible]
いゝゝけるゝ[illegible]
[illegible]
不[illegible]
[illegible]風[illegible]
[illegible]
なゝの音のゝゝゝゝ[illegible]
并[illegible]

[illegible]京氣[illegible]と申す彼社[illegible]
西おもてに海邊[illegible]海邊の
稲[illegible]田[illegible]
むれ[illegible]
[illegible]一首は[illegible]
[illegible]
[illegible]
博多[illegible]
[illegible]

四五日わるかりしかば
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

むさぼるれどもとこしへ多代までの
あつまると玉のをのくすれども尽せざるく
なりゆきて行ふよりて作るなの命をおし
うまもさん多くみすれほうしうふいまさに変れる
なそしらの変ふくるゆゆ多のあひをたにも
いふべくしらるのゆえにそやるるか
まれりいくゆゆゆゆもいのちふ
あるもあるひ命作作弟や

拾葉抄第集巻第二十九上終

扶桑拾葉集巻第二十九中

目録

そうけんこうあけぼのよいさけるの道の記　豊臣勝俊
奏妻乃乃の記　同
敵山ゆゆてし辞　同
花山乃こと葉　同
ゆてみこ本枝ゆの紀　同
如来院よけこ紀　同

稲葉内匠頭従五位下藤原朝臣
松平越中守従五位下源朝臣
松平隼人正従五位下源朝臣
道春法印
佐川田右衛門尉
妙寿院殿別
春日局
永寿院殿別
正意法橋

同
同
同
同
同
同
同
同
同
同

拾葉集巻第二十九中

参議従三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

雜部

豊臣勝俊

波水の中嶋のすゝ山
有てゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵

秋とさいたる驛のすゝ山
ありてゝ〳〵ゝ
わすれ草
みなひきやま
ゝ〳〵ゝ

なまはとをちこちに格ものあるをもて
まもるをおもひ
きりしろし　伊勢の海か
のありさまをめなれたるくいる
といふ所をもさるのみなとり舟よりぬ
きれもあるをみることをいふ所へさいをも
しるす　七里のとなりをもくれを所にて
更めをしとふ所をふくれをもふくを
里をもるをもの地をもりをもをみて
わるいをもくわりけるをもをもをもて
つるきをもをもあるを風をもをもをさい
はをもをもいめつをもをしをもをひろを

ちりみなるをも

何つとなく
忘れるやこいとなれかつ
憂名のまさるまちいまさぬ
さ四月ちかくなるに山ちまち
思いつるまて
むすしいなりよりまつのつるえて
人こそあれ
その日すなわち庶まいる
をのまのかたやり
家のかたらひ
ちりて出しやうの花のかたに

まさ立むとよるの月のうち
きみをまいりてはよのまれめや
とのるまひしこと為みてひまぬ
さそわるやさそ行るまちひまう
ちるくれはまちうきあるる
むしへ寺なるして苦まう命石
をくのうをのる医房のぬ行ぬう
すむまたのつか すれとよ四まてり
しハ二入三入中いんまなるまとたち
まりまくうをとをくもも
ぬるあるるのえるいかしいそ

さいきやうの人ぬ世ら世国さかえて
むしの人をうらやまらぬ心みう
まうら水海いぬ海のとより四里のりて
いとうきなれそ山おりひけぬ山ちち
すまの浦といふ所ちかくなる松
明るより月をもしたふ

祇園へ詣入ぬ

ちかくの宮の月をみるれ
祇園もいとやうえなる花
おりしをとる人ていつよ
よるの宿なまくらをしひ

うらか
なるこうら祇園をりて
京路をとおるさき室
角田河ちかくて入るより今
毎のまとしのいとのわて寺社を
やわらん
されそのの東路をとを思ひて
角田うらより陸奥へ
山ていとれと頼むし角田川
むもいれ鳥いわぬをとて
ちう事多侍よ わさらされ観音をく

[illegible]

いろはまつ[illegible]

[illegible]

五月二日京へ[illegible]

小田原[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

初もり申にすゑのまつ山なるひゝ朝日さしはなつ細道をゝ
ゝひのわすれもそひさしかれ
うゝ心こゝろ人をもむすびこめ
ゝゝ旨をわるしてゝの細ゝ
おゝしゝまゝゝる人のゝゝ
わゝさゝゝやひの光ゝ出山
さゝゝゝゝやゝゝゝゝゝゝゝゝ
都いゝゝいゝゝ秋重ゝ手枕
夢ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝし一百石不ゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ心ゝゝゝゝゝゝゝ一陶侯只物ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
世ゝ人のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
弟ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ度下御ゝゝゝゝゝゝゝゝ
三日ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うきくさをうちすてゝ
たゝくやうのなをかなしうるこゝろえ神の十わまりせの
神を月毎にわるゝ神の中わまり三百
としふるさはくまのきりのまもひる
四條ゝ三のわかをいひたるとあを
こゝろの星をゆゝしうれいとうゝ
ゝうゝうゝうゝをくりけ
投庵ゝまれりむこゝ人まもうひ
くくゝ心やをうるゝ紙ぬとをを
さゝへをるれいとゝひゝ茅戸

ゝ門ゝ茅ゝひくくゝゝゝうすす
大ゝをゝくゝゆくゝ屋ゝうゝ形のつゝも
をゝやゝゝをゝゝ河ゝゝる君ゝ雪は
つくくゝゝゝるゝ古ゝゝ古ゝ思ゝや
ゝるゝをゝ面くくゝゝゝやゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ面くく流ゝゝれゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ首ゝくくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆくすえのたのしみ
を毎日正月の初日うれしと清少納言
うらやましうなんこと
なりけるとかたりつたへ侍
まちきこえて婚の枝をうゑいまに
をのをのこゑを発てはるとなれば
めでたきにさきちる冥加
をうるぶ松をのうゑ葉わかきるみ
種へうゑをのもとすゑもちんとうる
らすれりひとうゑ一株まつ
はは源なりしうゑ御はみるうゑうも

あやなる庶子をもつる尾上の一聲も
時雨行出うちうく妹うゑ門のる
うゑまとをしうゑうちり
へめ絶ハ家つをうゑるをのとり
ちうゑやうく加麻のいひうしき
いてまうひすへうん昔今はものの
加うをきうゑ作日うまうゑ絶
ハ君ハ八九のはうゑすめうれと
衣ひるやうまをもうしうれはく
まうやいうを心ものさ知ぬもう
三十年わまうんをものもまうう

[illegible]

[illegible] 千里の[illegible]を
[illegible] 慈圓僧正
[illegible] 寄動寺[illegible]
[illegible]
[illegible]

比叡長歌　人一瞬　無窮感慨水悠々

あをまつ山根なる中堂にまうて紅葉のいくしほへるをみるとて

こゝをおもふ一度とりしをもえも
こゝろやうやうのみちも

武蔵師傳教大師の墓にこゝ
ゝをらいしゝ紅葉のうつくしき事雅
ふこゝろさへ極武つたもみてわたひ
いくらもまれあるをみる感慨
又とうもひしかさをを
こゝも百門の四十餘日行ゝ

こゝ御門をいるあるこゝろつゝみよ此山
みをと仏をつゝまりしこゝ高包香
う秦王の庭よ七日哭せしもれこゝ
思ふこゝなる里こゝなる麓藤岡とは
はくれこゝろんいのこゝ貴之の
思しの塚もこゝの志ゝくこゝゆ
ふ下ゝ有りといひるをこゝう
ゝれ海もなこゝ原なる里をこゝ
いくこゝ多所こゝかるこゝなん
定敦ての志ゝこゝれいひこゝ
ゝくまこゝ九重ゝこゝ柳原の

かゝり今の相国寺のうらに時雨庵
といふもなくしてそ長孫の法印
年毎の八月廿日まいすいする人〻
秋のすゑをまつ
ゆゑ〻しとて白と一ゆ
をしまれて辛ようゝ
あるまゝ所なるべし人々の塚も
ものまも大和まく人々も塚しか
人なし辛塚しかも
るしといふ死とさ
き土地見も
海業用る民の
歴のあり
るといふも
世のゝふさ
ゝれと三条乃内大臣賞燈も
ゝゝ年なとをしとすまり
ゝゝ多ゝれ此事一ゆ
ゝゝゝゝ
ゝゝ人世のゝ
ゝゝ
ゝ
ゝ

吉野を分雲をつたひてそこのをつたい行かゝるあらうさ事地をかすめ霧よりいとゝ心ちしてゆくゝゝ行くゝ山人なるべしいとゝいさゝゝゝゝ三雲のゝゝたよりゝゝもおそろしう藤の葉よりゝ深山奥をまさぐるよりあるゝゝ天川をわたるゝやあらんそのうへ山のゝゝ山のゝゝのすそをゆくゝゝまよひ入ぬひのすそ河ゝ社なるねをたゝの浪よりゝの

夢も因花すゝまゆく海に
いつこまでそはまのきさんをたおゝゝゝゝ

[illegible]
天暦の御門のこゝろやとより人の八重
[illegible]人一日中文をまな
[illegible]やきみのなりもられ
[illegible]の[illegible]やさたうはゆめひとる
[illegible]ちかひいま人をまつかれ
ふへきところのちりすきおらん
いまきよさいさ色こゝるまてふをいとわ
[illegible]雲みうなりこゝろわもぬもし
[illegible]とるへ桜をいつ[illegible]名残も白きれ
[illegible]の一ちらはるの[illegible]ちる

[illegible]ふれれ[illegible]みうれ
山へなのるをいつれ出[illegible]さいふる[illegible]の
書大納言師氏の[illegible]
横川法[illegible]むしの[illegible]を[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]やまなかれ
[illegible]
横川の桜
花山へ[illegible]

同

花山とまこゝのるいむ[illegible]良岑は宗貞とい
ひ[illegible]人[illegible]

[illegible]山のつきにていと
[illegible]みのりまひ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]方とあつえ屋
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

はるれぬるそらもくれてしら
のれいてしやけの雑るるまま
おもふもまうさてしるる
わのこころいくしかるを若てし
いそねそをあもうまいろる
何歳鶴花看此還不同白髮與青山
世人能被光陰誤只臥餘生水石間

遍照のあるいてうたあるかわ

高臥花山嶺上雲　歌詞行世出塵氛
平生願西堂夢　若有精靈為我云
為時法皇の御幸　あるうて　うせるりんと

おりまするあるもしなるむ
とりのねるなるわるめられけむいる
るきけんしそれより山科の御陵
まるそれるそもまるる松風まるす
こるふまそそるすやるをよりと
まるいるる

天地陵松種德全　撫氏止殿詠秋田
如今新拭千朝淚　疑是風聲彈五絃

それゆるほるを立海るる仰する若乃
明るる不圖おるるまるて叩るし
ひきの家をおるれをを明の月は

こゝろぼそくすみのゝれふ秋こゝろ。
めて

花よいまむかうはやまのさと
ちりのこるふるの雪の月

ぬまさへ雪を拾ふ詞

同

ひとゝなる外は秋をこゝろにして我国ようる
事まれ力のまれ雪まる山をあひて
りこゝちすくや吟仕むれてゝるこゝろを奥
あるて業平の翁に女をぬまさへすけし
ゆくさにのゝうまてあるひやるくる

めるこゝろはさるこゝろはさいかもまる
色は秋ひとゝやすくうん素性は師の
いまそほうくしるとゝまれと秋よ
こるあゝさくん人ふるをこれしとのゝ
もてさゝきてふるひふこゝろをつく
花さ花あんこゝろまそうるゝ信さゝよう
せよあほよさうの秋をねうゝすも
あゝすさるものこゝしこゝうゝ人る事
外いさゆる部素駝ゝとゝよ雪をう
ふゝとゝるれこゝくせる拾ゝうくせよ
と秋はをくをまふるこの事をきう

さるものに朝よりゆうべまでうりてゆくうりて
つもをへて色をくるしめるものはつねな
きなげうちをむさぼる物を選て性をそこ
なふものあり是れをあるじもまたしりまる
てゆるるをうつれを商のつけるものもち
うさりしる阿衡文を作りてたるもち
楚の公子をいまし時を儀蓋をうりて
罵うりしまうとも色するのあまりあり
さきのまをくるす物をうつさるといへ
る日しるへしまのこれきくも
うちを分てこれはものつうう君臣の家

あり濂溪の宮なのまを敬ひ閑明の孤
松をあつるすきとともなあるものなし
今此まをうつてうるまうしむへしと
いつもすてるぬるのとあるなり
いるせんとものあるのうまりてよ
へのぬするもおかしれりやといつるう
うして消ると問てうをみるをつけて
小野よなりうこの君爲なりといひて
あせもこうるをすつていそく天地
萬物即一機自家他家即一室ものを
ふうかしうるゆる聖人は一をうるむ

こゝはゆるして花をれんあり必とゝひ
まへよりワ君のあるを妻をまくへしと
ゆゝ箱よりうほくさとけてゝゝろよく
ゝゝとゝたりまやあれそんまはやそて
くんあるゝ梅よりらつゝゝるいき
ほひるのあるすぬすもいひるまれ
ゝゝやあやしの心ひもいと異しき

ゝゝ年しも宿るゝゝをゝゝゝ

花のあゝと人よいゝれる

妙秀院よはゝうすゝゝ

同

ゝる物をのちにされるいらんとゝれい
ゝのゝてゝのゝらるゝも常はゆゝあゝ
ゝゝりゝ巣のゝ戸ゝれゝるゝけなゝも
ゝゝゝゝあるゝゝゝるゝゝい思ひ
ゝるゝゝ卑あゝゝとすもはゝる世あや
ゝゝあゝいひゝゝねちけ人の肩ゝゝ
たて耳とすへて去ゝゝゝのゝゝよゝも
れゝゝ漆をゝ色ゝ仰をゝゝゝゝれゝ
ゝれゝいゝゝゝゝゝゝゝ殺をつゝて
ゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれつ
へゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ出を蚊のまゝ

けるをうらやましがるぬかく昔よりうるはしきをうるはしとおもふ人ありてわれひとつるよ
なるをいかでかの角をかくまし宿のあるまし又いとさはりて住侘し秋
をうぬ隈茅ヶ原の松生の音にきまよ
のまといへらく人市の中にひとを問さて八重葦さわる我いほは都の東ゝ北山
なとゝひさるをのをのをうらうへ
結ん四さ松ヶ秋の田のかりいほ
ゆりをれとをのとそろい人のたのをまを
もりをほのかつけをれし世の名

殆をんなをもをれまをれ
野ゝ人あるゝの氣をおりて中ゝえん
あるすゝゝ竹牆ハしとゝをのれし
も家出しぬゝく小藤かるあけきなゝ
て又人目なき谷ゝをゝ求いて結ひをん
木の高大方もゝをゝ出家ある山陰な
きハをとゝ終すゝめをてゝあるれ
竹えもいをぬとをきハ本ともんちをを
家をあひて りとをるゝ住をハたのも
なゝなをる松の秋風をとをかをもを
村住家て家の玉の緒吹をゆをを

[illegible]
[illegible]人[illegible]あれ[illegible]
[illegible]やを庵のわ[illegible]
あれ[illegible]し木の[illegible]月けた[illegible]
ひよりけよりまし[illegible]の[illegible]藤衣
の神をうるわを[illegible]
[illegible]花の[illegible]
[illegible]時[illegible]
[illegible]をむ[illegible]
[illegible]に[illegible]
[illegible]
[illegible]八十の[illegible]
ぬをのこ[illegible]

いと[illegible]人[illegible]し[illegible]
げていち[illegible]
[illegible]
とすま[illegible]
ち叩[illegible]
十の通[illegible]
[illegible]
を強史の暇つ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

八月十五夜のくもゐのかぎりなくすみわたりたるに
名をおへる樣外樣にて　れいの　松をそこに
うつして　たほりきはなれんかはうかさなるあ
きのまん山も麓をまはいとひけさやか
にてあひやとりもする　人の四方の中山よりは
あてはけれなくうらふしきおわれて
すこうれんとて　有しさいへと　山つと
まねきすと　ゆいれをなてあつまるさ
にむとをうはあるさへいるをきたけは
やんなるやとたゆたふまに　思
かゝる　愁もいてくるひやうにあるま

さてまのひうらとうるうちにうえの
梅よりふうり　山吹へうらうるうちおくえ
もあるまおもかるやと　まへ　別はあるをうち
おしまや　萩へ　美むを　四のをとかのもを
いつしうと　書うれて　えになき　うる　鹿の
つふさうも　出たうるうまつさいえをおもひ
いううの　比れうのれ　何れはゆへのをまと
月のかうやつしうちまあるね　月れへつも
まうて　年へ　りうもあををしし　何る
笑しあをうれはや　かくまもおほうて
中旬は　加賀へ　入て　ゆく　たまへる　南の

まて稀の里人のあすくるまてあるさまと
ゝひとゝかたゝしもゆくねひとり雪のゝ
今もうゝまけうちあらるいもやまうまする
いかるゝねを枝山つゝしたるゝきいとう
てゝやをのほとかゝるゝ見ひをのゝてをとゝれ
そらは雲をいそゆる雪の八古風を
まゝひとゝあるすゝゝ雪いとゝ見よて
ゝゝゝいゝゝねをあまに園をゝまゝら
ぬん方さをねまはけれゝるにたゝまて
さゝゝけまゝと叩ゝゝ
なゝやあゝゝんゝゝ

うま人八尾花ゝきいゝ雪せを
我もゝにあゝんゝもゝす
墻ゝによひてもとゝれ我いゝ川ゝ
にゝゝる酒を書ゝのむゝゝ
稲葉内面よはゝゝもゝゝ

同

稲葉山八ゝゝ雪よゝゝる松のみは
ほゝてつけて枝さゝふるよひおゝゝ内面
ゝゝれ人ゝゝゝ故中納言秀秋卿よものを
ゝれをあゝゝ中ゝとゝゝゝゝひゝゝて
魚の水よゝゝゝん雅度のゝゝれゝ

[illegible]
うゐいてやうれ只今の四代のそしめうる石
田は峯世成そう賜る天の下なうそひき
そうれ　そうほひもうれよりをすへきわいな
らねもこうまあるまあうめうひうるあつまれ
うけしきうまたうて後後やうそれ海れ
こうそうつうみもつうこうちをうけて月をみ
うひありげるやつねる後の美作や久米の
そうやまそうる三つのくるれはてともちうう
しめいほうあうふあんれとうれ海れ峯
なうすいとうそうてうせましあうらしさい

そむううあり　そちつつへきるのひううう
もうすやうつうれうむすあれぬていきていつ
くうそをしそうしもるるのうひあうし
うてうひうさふうちうをつううむき
成うけて秋のしまもいのちをうけして
らの武士ともいきうひをうしるひうちる
うけしなうれもうせそ本の高れうそま
らすなうてあくをのうう面くうちうく
よあうれしのちうをきううるまそひある
いみをうすきうすうれもうちあうふる
よのうしうたうひてもうぬせいう

さすらへて釈ハるのあうの句ほけなく
妹ハ背の山陰をつたへしらうき家わろひ名
つもれし秀秋のあとうくなりぬるをとな
よう内匠ハうれ〳〵なけきいとくちれて
おもへれとあさくさすまのつ方なきて
ちしてあまくちるぬるをにいてあり
けんとの大樹の乳あさかてうこうしは
うこうは編系ありしは軍信水なんあそ
すめれむ〳〵ときうあひてくみそれと
のこころあさうす江乳母なまけるを丹奴
ろ寺とやいひて高代のはあほえいとやむ

てれ　こるあるをなて　ゆとひ
きむこのむこ　ゆうあやしは
のこをこけまこもうこれ玉の髪よ
きこあけてんとあるこ　まハせのこ
なしなるもあるすもそれあてこひれ
きこのなこけをこちよなえこあちう
ここあうも

きろこ　こうこそかまハむこされの
いろのゆうをきみこれ福ろや
ちこうをれこつ花けこをけてのこ
いれこのやまけまけとこのまん

はるかしるまこくまるまさきはうせ
やのうるの　宮のうら人
松平城中まはるすてるふ

同

うれしくふるきひいろへより
ちらあをけんたくみき山はるるとい
へともちをかのこころをあるすす
ゆるるは城のいろうあをるるはるる
ようそうるるるもしれんはいけはあ
うけは世業はいはるは松平城中の君を
さへさるるあるするるとんあるるかるえ

とはうるるあるるるやるるる
くさるへきものうるるなるをあやるゆえ
かるすはるるるるをはるるるゆへ
今歳は老杜の草堂をしるる寇相は魏
はるるをもむきるるふるるひきいけ
まし

松るるる門はなるにるるやるも
るるをはるるるるひるるん
つゆるはしるひるるるるれるもきるや
るるるるはるるるをのるるるる
るるは今はるはるるるの舟をるいまして

[illegible]せれ人をうらぶ（きうけたまはる
あさましう[illegible]れも民はうさをうちちるひき
四面はあきうせいなるあをとそうるうさき
もあさましゆうる大臣のあほくまかれる
をもまそねゑのうぶ弟よそをひぬ
うろうこひあほうけふいひつうをすくきう
なてとくおひうをゆうほうを月もう
ほうぬせうそうういろはを穏なる文湖外
ハ色うけるけ九もとあういうひうてるすの
ういとおうしうそうなるゆいさうるうれを
うをのつをとなうてうろのいうをみんてう

をむとうのへ
うきしけうをひうぬううれけう
をとせぬうををうろもてきけ
ううひきて卜けうほうをひすも
行うあやゆるあてはけれ
生ゆん事をあはけけるを
うれうをとうくみぬる
うれけおうをうのほうあは
君をほうをうをうのひをう
きみうをちいうををあるうれけの
ううはうをうや天はねうも

拾波道歌つゝき

同

たゝ屋とのゝ雪をよみて　天地八すみ紙あり
きゝ人くゝすまてゝ　ちゝのいとゝうるゝ世界も
くゝとうるほと　秋きこゝろ　月日は一日一
秋よゆきうゝする　たゝさゝういわれか
きゝとゝ　ゆれゆるゝ　雪のうすくもゝ
いくゝもうゝるんま　いてうれうゝまいい
とちいさく　目もんく　をうれもの　ホをう
所ゆゝをつゝ　すむ人もあれをな
ほへ　こゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ

ひうとれてゝ　ひゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ
みもれゝとゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ
と　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ
てゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ
ゝゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ
いてゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ
ゝ

箱なれとうむるのてをつるいとおろし
ともすれは みつりうちつけて後の世
ふたたびあとさきとあくいいてうちき
ふるひしるまつきくしてゐる白ゐも
のかしらきハ梦をあけてもりよう人
もゆるさねよしあしさもしるものくる
おしるよくれのくとありうまとらひひ
つけうの武の袴ちをまるうかつきともハ
まりうもしいてこをひくしなとようを
あるをいとこんうをの冬は日のとくる
きいいてなんとす 蕭のうゐは鼻もなと

ひさんとうひしゝ本の系こんうをうしく
衣もうゐまる山うををあるみをとれ後
をなるあいてうまる山つんうやあんすうハ
尺くねとあくうるの袴梦してあとはいうま
とをあうくうる人とをとひてけてや
ふあらうをまき十はいうくいをそよ
と系衣のあうとうをんとひをねも
うしくとつまはすこうすまう
るくて人うをおもをぬきぬをあをゆる
をあるをむうのうの系なとひうこもゐ
うるあうを例のうをしものおこ袴これ

うゐつるくるとおもふこゝろのきねなれといく
れしとはおもはさりけり

紙屋ゝ

おもひやり長あきれとゝ物よ
かくもいひやりまゝやゝ

道春法師にゝゝるゝゝ

同

唐人の舟をゝくてなつかしい山ゝゝ
ひとりこちつやゝひの之日れ氏ゝ何
れこゝき遠ゝおもひやれ大伴ゝゝ世ゝ
めゝあるゝゝちしてゝゝきゝれ女もゝる

とひもすゝまれ一名ゝゝゝゝ紙
れゝゝゝゝゝ花見ゝゝゝゝゝゝゝ
とや林ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれゝゝ谷ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ足の音をき
てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
くゝゝれ中ゝ和れ十ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
もゝゝゝ人なれいやんゝれゝて堂ゝの
ゝゝゝ男ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
へし東の之つひいをまなゝなゝして私
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うゝけしきもてつけるるゝやこれてよ
をうすれぬるもしくるひるよみとせをす
まさきくりとこゝゆ立こゝ有てもねそ
さられとやよいせの海のときこゆ漕くお
るもゆらくもつゆそうゝるよそのまて
かすくりといしし酔なきもいくふせん懐
ゝこもるとくゝれなんハ口惜うすや
あるかとかゝみよほゝるむもつきなうす
やあるるおもみけとそういけしうるる
の方さけらるて文六日あるて せそ
うすこれを一日あるつるこゝもうこはと

あくこいつるるていとこまやうなわ西手法
ゝゝ中ふと思はうけ風うゝふて
よもゝもて出りく

百卯一門閑　君来對酒盃
殿痕何敢惜　花徑与清苔

武仲ふまくわ
ゝなかとおうこ
いひやまうてこ
けりとていこ
もてまあこ
ゝ変とあくこ

ふこゝあ
うまこ河し顔をつ
き序こゝはゝ
ゆくまこうしは
をすし脇よあゝ

九田ときれうまつけていろなきこのくひうあるこちしてたよくもきれとまこうほとをの山吹を

こくりんこうよ花さく山ふまい

花のくちやいての星人

かくもいひてむうとくなるぬいふ

よきらくうまつてあるまつとも紙

いとおほくやつけまて山吹と酥醾の

いなり数冬とうけるもれるくるや

これと水陸ようとくなるもいとも

ものせうる等ふうも山吹又山振花も

うきり巨勢の春をけつくく椿はくく

おもへ八重代とはよあれとまものとふ尾庶

あのちふ棟の宮ともちゆもあ登杜

ふもを番ふもいつるも杜衡ともしら

すの萩すき女郎花蘭とれ文字さく

うのねゆよやくこのきなりて振ふ

す山梨も山椿のさほやとをそそう

ふすて大和寺れるひうるすもと

すをもちをうまねこなるしきれ

これらすかきこを御もなるひふ

うるくくしこれも大方は氣まわ

それなんかる伊衡よあひて見れハいて
ハ射恒ハや せうてわとうをんいてハ行
醍醐より あすハ〳〵れもしてをれもあ
かれて名をえ居る何里ハ車ハ黄昏
あるせる臣てなハ〳〵まハふ仲ハとハい
かておもをもこのそれのしふ人ハまハな
くをこ成ハと分もしるもハ〳〵を異なる
らもハなすを色ハ顔をるやまんハ行ハ
すロ情ハれハ老杜ハ行ハ行ハの白ハを
らるハの一もとハきハ花まへハれをハ
くハくれハもてるハけやハるまハとてあ

地きなハいハハせんなとおハハれあハさ
きるハるもあてくハあれハるハ行てあん
堤賞歩冬妖艶春 如童釀酒中新節
従今欲記醍醐字 落後枕幃好可人

和

千紅萬紫落殘春 此物無心何獨新
胡蝶樽前百年事 對花不飲是癡人
うとうとねる和ふさしれ山ハと
夕霧ます 知る友人
佐川田のあようてうをすをを

同

人のこころ移ちけるこころもしらねいひさか
まくきなるひいむこういまと弱くくきるこ
移をきあるていふれいとこるおうむとま
つけこそつけ世中をあもひうもしける
まや音れけ里こころてすきへあるこ
しひさくとこをすひやこもりよ
こもうこもいてをくけこころりひを
やこねはるてあけらるまるよ月のもち
こころくもねれうつこをこうけしをつ
さくもけこうきあるやうよ佐門田ある
こうなるこうひきこくほもあるをあるこ

ちしていうきこんけこころりなるやま
しこうつるなんいまるる成おここねうまこ
ひおこすついてる江のこま岩よりあるす
あこしふこるつこけ稲えうこよ
ろりあるいのこすき事なきあけこふをあ
こ心こけあれまて分すこるなここ
まやこりけけすきみてきいのなこけ
すこねうふひこりきこすここいし
とすこいこくおこすれるこむこひ
ここまつこねこうこるこいひを又る
こるここまやい

きみすむ山のあなたにてすて
ものきいろのあることをもみ
うつしきれる木のやまにいろんん
紅葉してちりぬさかるよれく

妙秀院餞別

同

ちりぬひとこゝろへなる十あまりひろ
のそしなるの秋 惺窩師山さとの月毎を
菩提寺を分入給ふてありくこゝ二千
里の外をおもひやるまゝをきてけちき
なとをいとなとゝまのすゝをうしこ

四まぬ如何ゝゝ
百ゝ用さんしくて立さなれる雲のま
ゝゝやまきやなまと人ゝの秋より
花なれも中ゝおうゝそひあひの海を
のゝひゝされとゝあゝあさ海をワさし
外ゝゝむやなゝ山の妻をゝゝもゝて
椎の葉ゝもてきゝてゝへし
ゝゝ花更りまゝた山の泊のゝまのゝり
てまゝうゝけゝていゝれゝおうきはと
ゝ色ひすゝて無ゝいりぬあゝつまちゝな
まてゝゝれ月のひゝゝゝやうすて

おもひてとうへ[illegible]こちする[illegible]　涵入てを
のきに[illegible]ひまもなく[illegible]ふをとりいはをうつ

山雨滂沱佳節空　曉堂布霽倚清風
望中八萬三千戸　粧點洛陽成月宮
佳月常雖好　中秋更若新
一樓同此會　千里豈相親
今夜舊朋友　明年何主賓
浮生無定在　快笑仰蒼旻

おもひいてきこゆ[illegible]せの
あまれをこひ月よみまゝや
と和てと　秋はあきれる月うはよ

[illegible]ふ[illegible]秋のよ月
天のそらなる[illegible]ふれと
いひもひて林柳羽毛をうゝいて
[illegible]ものつきるゝ[illegible]明るゝ[illegible]
[illegible]やてをとゝ[illegible]ん[illegible]とする初[illegible]ける
[illegible]きりわれる[illegible]面[illegible]きゝ[illegible]
おほ[illegible]ねり[illegible]て又[illegible]よ
のことなとのゝ沼[illegible]いとゝ[illegible]
[illegible]いてゝ[illegible]をふ[illegible]れも又[illegible]
面をえねこゝ書[illegible]て[illegible]
作れしあ[illegible]ふ待のいゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

紅葉のゝ[illegible]ま[illegible]濃[illegible]ま[illegible]みなきや

[illegible]ひあるとまきりける

[illegible]

いさとなりのことをとり[illegible]

とゝ[illegible]ふ為家の大納言[illegible]

[illegible]

すしき泉のゝ[illegible]れをゝ[illegible]ほ[illegible]

あまの[illegible]ふ 吉野[illegible]

[illegible]ひあるをゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たそがれまがふこゝろの山ぢにもあらけなる
れも〳〵と海ちかき浦々を徐行するの
道行人をいとゝのこゝろをよこれを
なやむとなるれものゝかしまくやつまを
のこるこゝろさしるれをいとゝ哀あれ
きれをつゝをいつゝふとゝなるゝよりも
そてゐんすゝかそれ是いかふ
れなきものゐれもをのまをこゝろやま
しきやゝゝのゝりあをきまをこゝをれをこの
こゝをゝやあちきれゝや
きみもあまへ紙とものこゝひ長

きゝしるれてゝをかるまて
こゝをみをもゝきこゝをいてさのを
紀のせきもりよ人れをめて
春日の門屋は錢別

同

ひくひあつまの山ぢにのゝりの人
ゐのすゝは屋いむこゝをれ錢をを
こゝをすとあるよ春よいしのち
いくゝをゝ行ゝ仮のあほきおゝを
まいりあまして今の下まつ里こ
ちのゝゝひしりの書をむつきれなるよ

[illegible]
かまつれたてきまてそのいつの母様
守又つつものさやうに沢やさきき
ますをもて出雲八重けうちうくみく
おもひ入ぬうん[illegible]もちあひいとやむ
とかうう[illegible]る父の敬信仮あまう
いとはひいてるるもきくてて
ろきさいていうう女のさまはあ
まりて苦のうへをあそれ見めまれ
ふせそうてれうをうちうあもひきて
むたすまるけまる四の字志さうとも

足をうまとまとい山ようは出よもあ川
ますかうり海つるる紙あきうねい
風をさ紀麟をはあて一会あくそんま
そ紙福うう山まりくの館よい老うま
まる民はしまりつうもひ入ようよ
てものおほうふうきあまうてうちよ
てかうかうかこやうへうまひぬまい
清門うそうち信四毋ふこの代と
ふひ大信をさうあく沢うきもいや
きも仏弥のあうそれまるとぬつき
ちこのこるいうねゆくんすれ

除あまたうて葬原の中陰あをおも
ふもしに付天のうやゝ稲の尺とも
よひきねて おいて
今三笠山より流れ春日大明神の
ゆらとなりましかふの門つるもすて
門のゆなれよをとゝ小の夜泊さくむ
をゝ紙をうのみまいとよひきうもも
いうまたひうをやつをを塵よ
まをゝとをうまやさを紙内てま
いう絵へふさ海ををかーくひうをて
いへををなりしりの門ゆ屋ちつき

こゝろよくうちゑまをおいしまゝ沢ゆ
きゝ紙うへ除すせさまの世ゆうまを
てこまやらなれゆまものうう笑ゆをて
二日三日ありてまをてをりをてよます
らひをうゆうをうをうをるをうをけく
あるれをうりゆきて月も大日屋う
りあうねをあをてをうくをうまうむ
とをれををゆ人をうをてきをのよをけ
をきうりををうものをれむけうす沢
うをうねうる後帰のゆひらいををちあを
やうゆりをなをまくを原沢くー

いる文あひは立田姫とをうまれ七夕
ものをそなりうきしなりうきし絵そる
墨のあうしさあうもうりうもて吹
ようをさえうちつつやうをねつつき
てうと思あるこものをうしまけし我
あうしうをといとかそうる中ををき
いうかせんうきものの紙うをハかりのあうハ
うあるしうとうをよむうとになりぬいうし
をあるのうをしもなし例のうをうハ
うもうをあうハうもうていとあをうし
あきとあねの蝉のうれのひうるを

ふりはとのへけしうをうる
みやてをそうすをすうやま
こゆあるへ人る宮の名もおし
あうを紙わうはのうけ名とうを
せきの清くをハ老人あうを
なうをあもの紙のいうもえを
こゆ山のをけしうる
世の中はうをひはをうをすのう
うをもみるき百の名これ
はうひはいはの宮さうをあをきをる
もををなうて百をセ叶紙しうあをひを

のくるしかるべきなるべし

永喜法印餞別

林子のあるじ　兄の行うの人のもとに

くちをしれば　きいらくやまとうた

ろうちさとを人のいふことなるすいるとち

え海山をへてきてきてるるの花と世

きてるるれいほうのきあるほうほうに

けちうえ容さあるうかすの長てうち

等るをちうなるる寒よ傳をうを

けん人あるくよりうるるや心とことうあるや

うれをいろしうむうひあまてるあうつき

ときいうれしきおりくふかしらつと

へてあるひなといくく奥あり叫ろあるま

うちあれていきくうれあるふ

ひうれあるえもいひやす

あきの世よひもうぶのうまう

妹うすまひしあふつくも

伊の集ますやうんのしやなうれ

須人とワまれうり妹う結ひしひも

吹えすとういる古弁なるしをのまう

いるうろも寒うし結ひしひまうへま

花ゝあるゝ限り春いとゝくもゝ
のかすみをのゝよと云へき紙ゝをふゝねる
ゝゝゝゝゝはいろ〳〵みゝゝゝれとゝ
ゝゝしのり所ゆるゝゝゝゝゝゝゝ

莫嗟此別爲官職客夜求眠夢一奇
丁固聲名都富貴羅含德化是文詩
野花白〻馬歸去原柏青〻牛笛吹
只恐天涯消息乏孤蓬飄轉奈歸期

正意法橋餞別

同

ある屋つゝやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ

まといつる藤をものさびしくえもいはぬ
の人は紙のうへをかうしく西園寺殿の
ものゝ百年をとしをへぬるころさし
をかゝまくらやんことなくて六十余
日をうちあつまれる武蔵殿
の冬は毎夕もこゝろひともとゆく
といひけん宋の孫さしをそさあれと
あもひをめくまれまうり中のしあうるんを
きこゆまるやとそうしいひやるまれし
行しいもは林のたてまひ菓の
園をあそとなくしの

いをひうるる文のくりあひうれていを
杜は沼をまれしるうをうるふ刀のわさ
るをあてをまれて氏のうの紙さけん
やいをもうるやとみうすしをあひなれ
紅しくまもうむひをなをこと聚
とあをりあひこふ毎をあろれ水の
風をなる紙をつうあ(ひ)ふりのさし
むひこもけるうこておもほく
すり紙をしうをの所はあをなる
紙をていさを月をいつるうさと
まを名おほるあてをの紙をう

すゝすゝ掛け紙儀て一之別まるいて
きつゝ〳〵む祝つゝまてゝゝろけまもの
夜のよもきを此人の沿代さやをゝろを
てゝ迎てゝひゝ〳〵ゝしきゝゝはゝうゝ基心
ほゝをゝてゝよゝのめをけゝをゝてゝゝちや
ほ筆みすきひゝ始ゝうのゝゝゝも祝ゝ
ゝゝゝ〳〵ゝるゝ〳〵つゝゝん恵〳〵ゝんゝゝゝふ
さゝゝゝゝゝゝゝんゝゝゝ志のゝゝ〳〵ゝんゝゝき
くゝをのゝゝものゝゝゝかゝゝゝゝもゝんゝゝなゝゝし
ゝひ夜ぬきゝゝゝふれ美をゝゝゝゝね
ゝゝゝ祝のなゝゝゝゝゝゝへけ

ゝゝゝてゝよゝゝゝ口別祝ゝもみゝゝ〳〵ゝ
ゝのむけゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝを
ゝ祝ゝゝゝゝさ祝ゝてゝゝゝゝゝてゝゝゝ
ゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれ
りすゝゝなゝゝゝゝゝゝゝゝゝ京祝ゝ
実ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝみ
玉藤ゝゝゝゝゝ祝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝん妹ゝ行ゝゝを
武義祝ふぬゝゝゝゝゝゝゝある紫み
いゝゝゝゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝね
祝をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

をとゝのひるのうれひ
離筵頻拭淚　君去會明年
旅館聽疎雨　高樓望淡煙
洛陽霜樹月　別墅雪梅天
斯景斯時恨　誰能千里傳

扶桑拾葉集卷第二十九中終